大学時報

2025 03

No. 421

｜特集｜

地域の中核的拠点として大学に期待される役割

―地域連携・社会連携の観点から―

日本私立大学連盟

ISSN 0288-1748　2025（令和7）年03月20日発行［隔月刊］

だいがくのたから
Thesaurus Universitatis

西南学院大学

ドージャー記念館

1階常設展（ドージャー記念室）

2階講堂と聖書

ドージャー記念館 ―一〇〇余年前の煉瓦建築

西南学院大学の創立者の名を冠した現「ドージャー記念館（西南学院大学博物館）」は１９２１年に竣工した。煉瓦造り３階建てで、ウィリアム・メレル・ヴォーリズ（１８８０～１９６４年）の設計による。かつて１階は西南学院中学校・高等学校の職員室や事務室、２階は講堂として使用されていた。２０００年には福岡市都市景観賞を受賞、２００４年には福岡市指定有形文化財に指定された本学の象徴的な建物である。２００６年に名称を「ドージャー記念館」に変更して大学博物館として開館、２０１５年には福岡県指定有形文化財（建造物）指定を受け、現在に至っている。

ドージャー記念館はキリスト教主義の学院教育活動方針に基づき、キリスト教文化に焦点をあてた特色ある博物館として定評を得ており、ユダヤ教やキリスト教文化、日本キリスト教史、西南学院の歴史などに関する約２０００点の収蔵資料を所有している。キリスト教に関する歴史や文化に関する常設展のほか、年に数回の企画展や特別展を開催しており、２０２４年度には「創られたキリシタン像―排耶書（はいやしょ）・実録・虚構系資料―」、「知のアトラス―宇宙をめぐる教会と科学の歴史」などを開催、各方面から好評を博した。また教育普及活動として「楽しみながら学ぶ」をコンセプトに様々なワークショップや講座を開催しており、一般市民の方々や子どもたちにも親しまれている。

ドージャー記念館の周辺には聖書植物園がある。これは聖書に登場する植物を可能な限り復元・展示しようと大学開学50周年の記念事業として１９９９年に開園したものである。ドージャー記念館の煉瓦を覆う蔦とともに、日々、学生と教職員の心を魅了している。

University Current Review
大学時報
2025.03／NO.421
CONTENTS

だいがくのたから　西南学院大学
大学点描　名古屋学院大学
巻頭言　建学の精神「敬神愛人」を繋ぐ　赤楚治之
視点　全学教育の展開―成蹊大学の事例を中心に―　森雄一　10

座談会　「万博」で示す、大学のプレゼンス
植田光雄／栗本聡／長谷川哲／木嶋淳／（司会）音好宏　14

特集　地域の中核的拠点として大学に期待される役割―地域連携・社会連携の観点から―
ウェルビーイング・フットボールのすすめ　大森西三郎　30
地域つながるプロジェクトという地域・社会連携の「種」
―地域社会の発展に貢献できる人材の養成に向けた学びの場の変化―　三浦浩之　32
地域と進める人材育成―鶴岡タウンキャンパス、25年目へ―　坂井明子　42
三者連携による『陸前高田グローバルキャンパス』　松山真　48
地域と共につくる実践知を育む学びの場　高柳直弥　54
副専攻「地域連携・地域貢献」を通じた大学と地域の共創
―早稲田大学の地域連携・地域貢献と教育モデルの構築―　加藤基樹　58

ずいそう　多様性のある社会を目指して　木島葉子　64

小特集　大学体育が描く未来図
身体のリベラルアーツ―保健体育から身体知への挑戦―　吉田美和子　70
必修科目としての大学体育の授業変革の実践　川邊保孝　72
「教育資源」としてのeスポーツの可能性を探る
―東京情報大学・共創ラボの挑戦―　圓岡偉男　74
88　82

古代より中国で使用され、アラビア商人を経由して西方に広まり、中世ヨーロッパの航海に革命をもたらした羅針盤。表紙デザインには、社会の変化が著しい現代において、大学の“今”を映し出し、向かうべき未来をはかる指針とならん、という思いを込めています。

94 大学スポーツイベントの可能性　佐藤貴広

100 **寄稿　［私立大学のミライ―研究編―］**
「もっともらしさ」とのつきあい方　松田美佐

104 **私の授業実践～教育現場の最前線から～**
学生と社会人の架け橋となる実践的教育の実践へ―実学主義を意識して―　犬田剛

106 **明日への試み**　大正大学人間学部
学生の自律的な学修を目指して　新保祐光

112 **加盟校の幸福度ランキングアップ《スポーツ施設編》**
スポーツと健康を科学するスイミングプール　九州産業大学 総合企画部広報課

114 関西大学たかつきアイスアリーナ―夢を追い20年―　鶴丸憲一

116 〝アドベンチャー〟のチカラを借りて　椎名純代

118 **クローズアップ・インタビュー**
日本財団パラスポーツサポートセンター
特別プロジェクト推進部 特別プロジェクト推進チーム チームリーダー
影山範子さんに聞く　（聞き手）外川智恵

128 **新会員代表者紹介**
松山大学

129 **執筆者・出席者のご紹介**（掲載順）

131 **私大連ニュース**

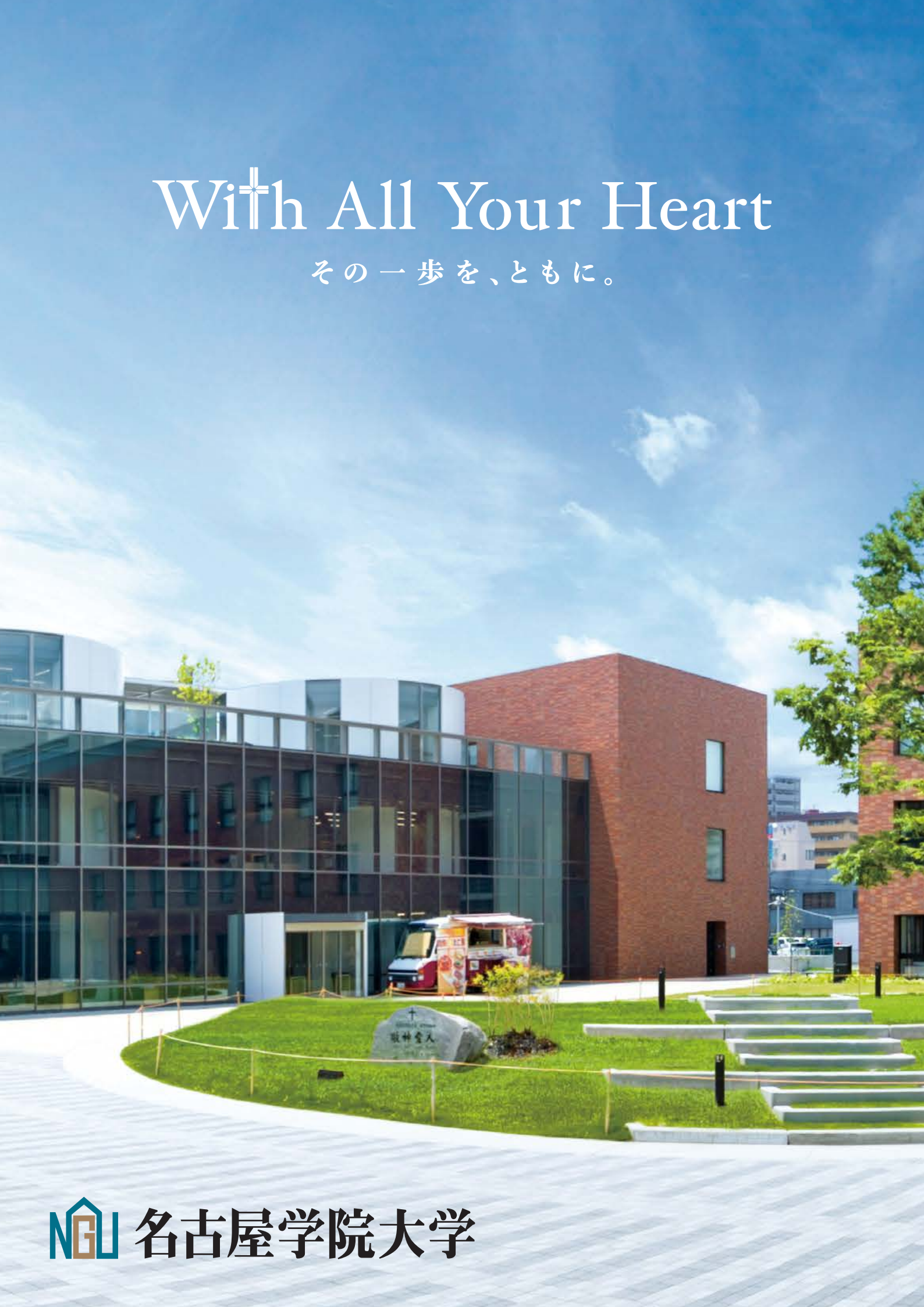
132 **年間総目次**

138 **編集後記**

大学点描

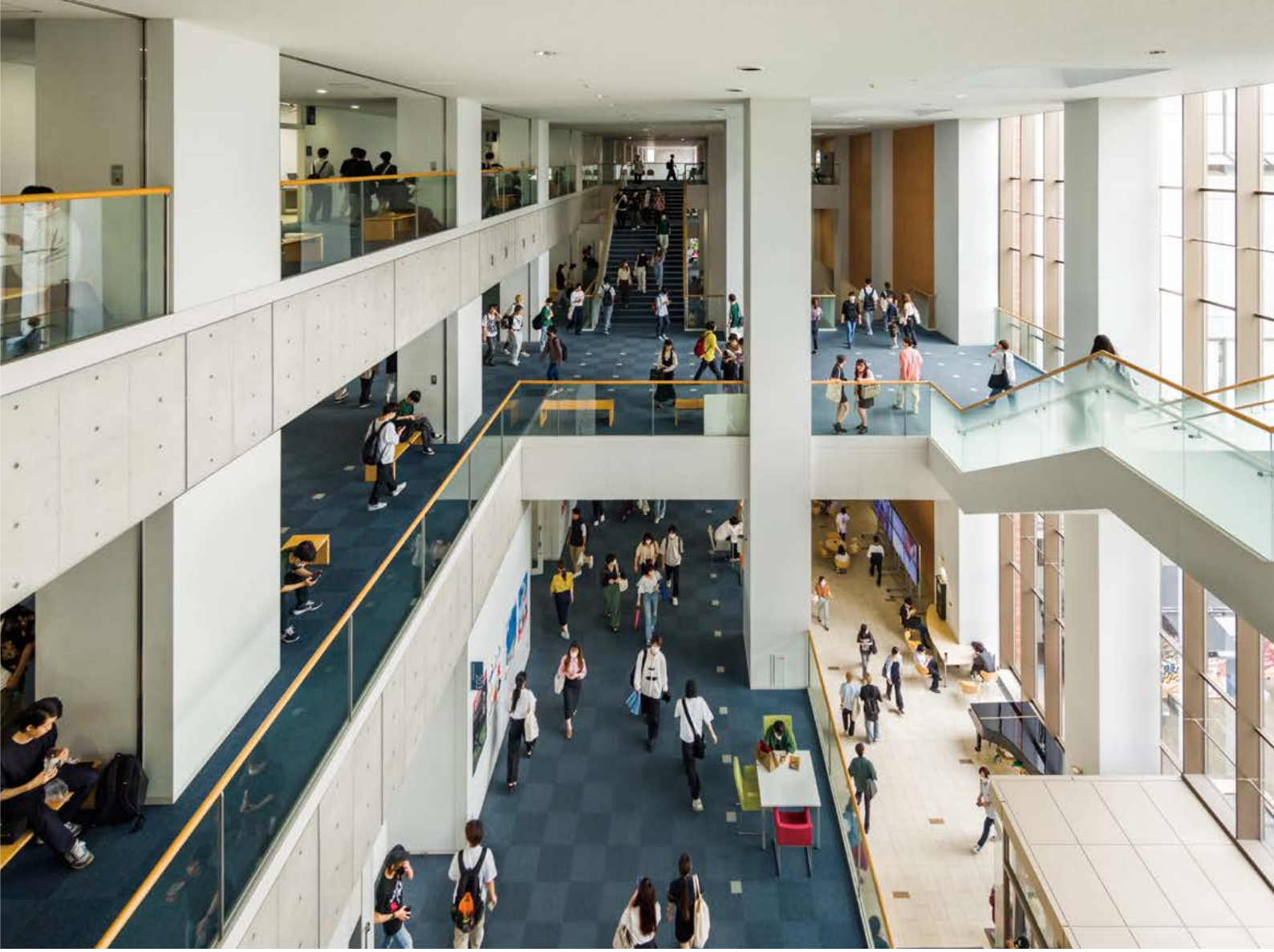
With All Your Heart

その一歩を、ともに。



名古屋学院大学

NGU 名古屋学院大学



名古屋学院大学

University Current Review

大学時報

2025.03／NO.421

建学の精神「敬神愛人」を繋ぐ

赤楚 治之　名古屋学院大学学長

２０２４年大学創立60周年を迎えた名古屋学院大学は、１８８７年愛知県で初めて聖書と英語を教えた名古屋英和学校にその源流があり、創立者F・C・クライン博士が掲げた「敬神愛人」を建学の精神とする。キリスト教信者が全人口の１％ほどの日本において、この句がクリシェにならぬようにするためには、現代的文脈のなかでその普遍性を訴える必要があると考えている。戦争や紛争の止まぬ21世紀、人として謙虚に人を愛すること（隣人愛）の意味を若者たちと考えたい。

視点

全学教育の展開
―成蹊大学の事例を中心に―

森 雄一
成蹊大学学長

はじめに

成蹊大学は東京都武蔵野市吉祥寺にキャンパスを置き、経済・経営・法・文・理工の5学部を持つ。それぞれの学部が専門教育のカリキュラムを持っているが、全学的に行っている教育もあり、そこには、ワンキャンパスの利点と本学の伝統や特質が生かされている。学長就任以来、全学教育についての取り組みを向上させるため、様々なことを考えてきた。途半ばではあるが、本稿では、その一端をお示しできればと考える。

1．成蹊大学における全学教育の現状

各学部に分かれて行っていた教養教育を２０１０年度より全学で統一し、成蹊教養カリキュラムの名のもとで行うことになった。その後、２０１４年度と２０２０年度にカリキュラムの更新を行い、現時点では２０２６年度からの更新の準備が終わったところである。大きな科目区分としては、外国語、技能、教養基礎、持続社会探究の４本立てである。技能のなかにキャリア教育科目と日本語力科目を擁し、持続社会探究の科目区分のなかに環境・地域、国際理解、人権・共生、実践の科目群を持つところに特色があろう。また、学生の所属する学部学科の専門教育以外にも他学部科目の履修も含めての幅広い学修を目指し、副専攻制度も実施している。現在のところ、心理学副専攻、総合ＩＴ副専攻、データサイエンス副専攻、ＳＤＧｓ副専攻など18の分野を用意しており、今後の分野の拡充も視野に入れている。データサイエンスの分野では副専攻の他に、数理・データサイエンス・ＡＩ教育プログラム認定制度のリテラシーレベルの認定

を受けた。上位レベルの認定が今後の課題となる。

2．特徴的な教育

①キャリア教育とＭＢＴ

成蹊教養カリキュラム開始時より、「キャリア教育科目」は、「キャリアプランニング」、「キャリアセミナー」、「インターンシップ」を中心に構成されている。これらの科目を教養カリキュラムのなかに大きく位置付けることは、当時としては先覚的な試みであった。この科目群の設計は、２００６年度のキャリア支援センターの設立とも相俟って、本学のキャリア教育・支援の定評を形作ることになる有意義なものであったと考えられる。また、本学のキャリア教育の目玉となっている丸の内ビジネス研修（ＭＢＴ：Marunouchi Business Training）は、約７カ月間かけて行う学部横断型の産学連携人材育成プログラムである。論理的思考力を鍛える「学内準備研修」、企業担当者の指導のもとで与えられた課題に取り組む「丸の内研修」を経て、企業での「インターンシップ実習」に参加する。最終的には「丸の内成果発表会」にて企業関係者に向け、課題の成果発表やインターンシップの成果を報告するものである。文系・理系にまたがる全学部の学生がチームを組み、異なる考え方や専門分野への相互理解を深め、協働して課題を発見・解決する力を身につけることを特徴とする。

②日本語力科目

「日本語力科目」も成蹊教養カリキュラム開始時に導入されたもので、当時としては目新しい科目群であった。これについては、当時文学部日本文学科で行っていた「日本語力錬成科目」という科目群を是非全学で拡大してほしい、という要望をうけ、学科メンバーとともに筆者も基本構成の策定に携わった。日本語を母語とする大学生の日本語力を今さら鍛える必要があるのか、という質問を一部教員から受ける一方で、文筆家養成にもつながるような専門的な教育を行ってほしいという希望を出される方もいて、バランスの取り方に苦労した記憶がある。また、日本文学科での科目群との棲み分けにも注意する必要があり、なかなか大変な作業であった。現在の科目構成は、「実践日本語表現」、「実践話し方入門」、「日本語表現講義」、「実践漢字講座」、「語彙・読解講座」、「古典に学ぶ日本語表現」、「実用文書の作り方・情報の伝え

方」、「テーマ別日本語表現」である。どの科目も受講生数や授業満足度の点で問題なく運営されており、一定の成果を上げていると自負している。

③自校史教育

自校史の授業をカリキュラムのなかに取り入れている大学は多いと思う。本学においても、成蹊教養カリキュラムのなかで「成蹊を知る」というタイトルの授業を開設している。創設者である中村春二の人物像と理念、草創期の成蹊学園、重要な協力者であった岩崎小弥太の人物像と理念、旧制高校時代、戦後の大学開設以降など近現代日本史との関連のなかで講義を展開している。また、近年導入した入学前準備プログラム「桃李になれ」のなかで、そのエッセンスとなる部分を視聴させている。学園史料館では、時期ごとに様々な展示を行い、学生の参観を奨励しているが、史料館独自の企画とともに学生による企画展示も行われている。

3．今後の展開

今後の展開として3点述べる。1点目は、２０２４年秋に設置されたラーニングコモンズの活用についてである。これは新設された11号館の低層階に設置したもので、広さは約２３００㎡、野球のダイヤモンド3個分程度であり、中規模大学である本学にとってはかなりの資源投下である。プレゼンテーションエリア、グループワークエリア、グローバルスクエア、アカデミックサポートエリア、リフレッシュエリアとプロジェクトルーム４室を擁し、学生の主体的な学修のため、積極的な利用を求めている。アカデミックサポートエリアにおいてはライティング担当とＩＣＴ担当のインストラクターが学生からの相談に応じるとともに、それぞれの企画したイベントを実施することになっている。

２点目は全学対象のグローバル教育プログラムである。本学では、２０１４年度より成蹊国際コースを導入した。全学で80名の定員を設定し、2年次スタートの学部横断型の少人数選抜制コースで、英語での学修を基本とし、意欲と向上心の旺盛な学生が学部の枠を越えて互いに切磋琢磨しながら学ぶことを目標としていた。この経験を活かし、２０２０年度カリキュラムでは、英語名称「Education for Academic and Global Learners in English」、通称ＥＡＧＬＥ（イーグル）を設置した。こ

れは定員を30名と限定して各学部に割り振り、入学段階からＥＡＧＬＥ生となるもので、各学部学科に所属しながら、いわば二刀流でグローバルに学ぶ、学部横断型の特別な教育プログラムである。このＥＡＧＬＥのカリキュラムを拡充展開させ２０２６年度より国際共創学部（仮称）の設置を目指している。これとともに、国際コースを新たな装いとともに展開させる、定員90名の新国際コース（ＧＳＰ：Global Study Program）を開設予定である。

３点目として、本学では、２０２６年度にアントレプレナーシップ教育の全学プログラムを開設する予定である。このプログラムは、起業家育成そのものを目指すのではなく、課題を探究する姿勢やイノベーションマインドの涵養（かんよう）に重点を置いている。全学から50名程度の学生を選抜し、事業承継など本学の学生の実情に合わせた講座も用意する。また、実務家教員を起用することで、現場のマインドを持った形でのプログラムを目指す。

おわりに

筆者が大学教員としての駆け出しのころ、「大綱化（たいこうか）」という用語をしばしば耳にした。言うまでもなく、１９９１年実施の大学設置基準等の改正（大学設置基準の大綱化）のことである。これによりカリキュラムについても、一般教育科目、外国語科目、保健体育科目及び専門教育科目の区別を廃止し、卒業に必要な単位数は１２４単位で変わらないものの、科目区分と単位数の設定は、カリキュラムにより、各大学が自由に設定できるようになった。ただし、これが教養教育の軽視につながるという懸念はこの大綱化実施当初から存在していた。本学においても大綱化以降の教養教育は試行錯誤の連続で、その結果として前述の成蹊教養カリキュラムが全学的に導入されたのである。全成蹊大生に共通して必要な素養は何かという本質的な問いには答えを更新し続けることになり、また、各学部の専門教育とのバランスが常に求められ、教養教育に割けるコストも限られている。さらに前述のように副専攻や選抜制プログラムも導入しているので、一般的な教養教育との棲み分けも重要な問題となる。全体を上手く舵取りしながら、大学教育全体が有機的なものとして機能するよう、今後も努めていく必要があると考えるところである。